ビールと鉄棒
ナチス・ドイツのオリンピックとチェコのマスゲーム

福田 宏
京都大学地域研究統合情報センター・助教

1．なぜ体操するのか？

ビールと鉄棒という、ちょっと変わったタイトルをつけました。私は、中央ヨーロッパ（冷戦時代に東欧と呼ばれていた地域）を研究対象としていますが、今回は、19 世紀後半に登場した体操運動について考えてみたいと思います。私が体操に関心を持つようになったきっかけは、1938 年にチェコスロヴァキア（当時）の首都プラハで行われたマスゲームの映像を目にしたことでした。3 万 2 千名の男たちが一斉に体操するのを見て、これは何だろうと思ったのが最初です。

このマスゲームが行われたのは、1938 年 7 月、つまりミュンヘン会談の 2 ヵ月前ということになります。ミュンヘンの「宥和」により、チェコスロヴァキアはズデーテンラントと呼ばれるドイツ人地域をナチス・ドイツに割譲、翌年にはチェコスロヴァキアという国家そのものが地図上から消えてしまいます。このマスゲームは、国内で軍隊の総動員がかかるなど、ナチス・ドイツの脅威が意識されるなかで行われたものです。イベント自体は、ソコル体操協会という市民結社によって開催されたものですが、軍隊による軍事演習もプログラムの一つとして組み入れられていました。その点では、このソコル祭典は全国家的・全国民的なイベントとして位置づけられていたと言えます。

今回の報告で考えたいのは、何故このようなマスゲームが行われたのかという点です。国民としての団結を示すために多くの人が集まり、マスゲームに自発的に参加したという点は、一見、自明のことのようにも思えます。しかしながら、それは本当に自明だったのでしょうか。例えば、21 世紀の現在においては、如何に大きな脅威が迫ろうとも、ごく一部の社会主義国を除いては、このようなマスゲームは実現しえないでしょう。こうした集団体操は、社会主義時代の旧ソ連・東欧においてスパルタキアーダという形で継続して行われていましたが、1989 年以降は一気に廃れてしまいました。「ブルジョア的」という理由で社会主義時代に禁止されていたソコルは、体制転換後すぐに復活し、今でも活動を継続していますが、往年の勢いはありません。図 1 のようなソコル祭典も時々行われているのですが、かつてのように多くの人間を動員することはできません。1938 年当時に使われていたスタジアムは、ソコル祭典の為だけに建設された特別な建物でして、フィールドの幅が 300m、奥行きが 200m ぐらいあります。現在ではプロのサッカーチームが練習場として使っているようですが、公式戦用のピッチが 6 面入り、さらにフットサル用のピッチが 2 面収まるそうです。今のソコルには大きすぎて使えず、かといってスポーツの公式戦にも大きすぎて使えない、という皮肉な状況になっています。

そのように考えると、ナショナリズムが高揚すれば必ずマスゲームが行われるというわけでもありませんし、マスゲームを行えば必ずナショナリ

図 1. 第 10 回ソコル祭典（1938 年）における男性（左）・女性（右）のマスゲーム[1]

1　*X. Všesokolský slet v Praze 1938*（Praha, 1938）, n. p.

ズムが高揚するというわけでもありません。「マスゲーム＝ナショナリズム」という図式が比較的成立しやすい状況であったのは、19 世紀後半から 20 世紀半ばにかけての限定された時期に過ぎませんでした。また、こうした体操運動はドイツやチェコといった中央ヨーロッパで特に発達しましたが、この地域だけに限定されていたわけではなく、いわゆる「近代化」を経験した社会では、程度の差こそあれ、どこにおいても生じた現象でありました。日本においては、明治期に開始された学校の運動会や、昭和初期に始まったラジオ体操が類似の現象として挙げられるでしょう。ラジオ体操そのものは、アメリカのラジオ番組をモデルとし、国民の健康増進を図るために考案されたものですので、直接ナショナリズムと関わりがあったわけではないのですが、軍国主義が高まる中、集団的規律を推進する手段としてラジオ体操が活用（悪用？）されたという経緯があります。その際、日本でもソコルを見習い、「国民精神の統一」を目指してラジオ体操を行うべきだといった議論が出てきています。

前置きが長くなりました。今日の報告では、我が国民・我が祖国のために体操しなければならないと強く意識されていた時代、つまり 20 世紀初頭のチェコに注目し、その謎に迫ってみたいと思います。キーワードとしてここで挙げるのは、タイトルとして掲げた「ビールと鉄棒」です。

2.『宴会新聞』から読み解く体操の謎

全くの偶然だったのですが、研究の材料を探してチェコの田舎を歩き回っていたとき、シュムペルク（Šumperk, Mährisch-Schönberg）という小さな町の文書館でドイツ人の体操に関する史料を見つけました。見つけた、というよりは、館員の方が「面白いものがあるよ」と言って出してきてくれたものです。それは、ドイツ人の体操家たちが手書きで書いていた『宴会新聞 Kneipzeitung』という雑誌で、ものによっては一部しか存在しないような貴重な（！）史料でした[2]。1887 年から 1933 年まで長期間にわたって発行されていたようですが、ハレル（Franz Harrer, 1869-1951）という奇特なドイツ人が頑張って書いていた 20 世紀初頭の頃が最も内容が充実していました。

例えば、図 2 は『宴会新聞』の或る号の表紙（左）と記事（右）ですが、絵も含め全てハレル一人が書いていたと思われます。右側は「大酒飲み」というタイトルの下、何故ビールを飲まねばならないかが大真面目に（？）論じられています。『宴会新聞』によれば、男であるために、体操家であるために、そしてドイツ人であるために、飲酒は必須の条件となっていました。これだけを見ると、胡散臭げな新聞のようにも見えますが、宴会に集まっていた人たちは基本的にエリートに属する人ばかりでした。リーダー格のハレルは代々反物商を営む旧家の息子であり、第一次世界大戦後は、市議会議員を務める傍ら、郷土史に関する著作も残しています。体操協会の活動の一環として行われていた「宴会」では、ちゃんと規約も制定されており、月に一度の「会合」に欠かさず参加し、その場で行われる講演や音楽演奏を聴いてドイツ人としての自覚を高めていくことが求められていました。飲み会の席では「外来語」の使用が禁じ

図 2.『宴会新聞』（20 世紀初頭・発行年記載無し）

2　Soubor tělocvičný spolek, Státní okresní archiv Šumperk（Märisch-Schönberg）, Czech Republic.

られ、実態は良くわかりませんが、少なくとも建前上は高尚な会話が行われることになっていました。その場を仕切っていたハレルは、「宴会部長」として飲み会を盛り上げるだけでなく、ドイツ人社会のネットワークを強化する、いわばハブのような役割を果たしていたのではないかと思います。

20世紀初頭のシュムペルクは、人口約1万2千人（1900年）、繊維産業が発達しつつあった工業都市であり、住民のほとんどはドイツ系でした。当時のチェコでは人口全体の約3割がドイツ人であったと考えられていますが、この時期には、政治だけでなく様々なレベルにおいてチェコ人とドイツ人が相対立する状況となりました。市民層の動きが活発化するにつれ、読書会や合唱団、体操協会といった市民的結社が数多く誕生し、しかも、それぞれがチェコ系とドイツ系とに分かれて発展する形となったのです。

では、なぜ体操が必要とされたのでしょうか？

大ざっぱな言い方をすれば、当時のヨーロッパにおいては、戦争に負けるか、或いは国の体制が大きく変わった時点で体操運動が開始されています。象徴的な例はドイツでしょう。ナポレオンの占領下にあった19世紀初頭のベルリンにおいて、フィヒテが「ドイツ国民に告ぐ」という有名な講演を行い、国家の統一と民族の団結を訴えましたが、その中で身体教育の必要性にも言及しています。その呼びかけに応えたのが、「ドイツ体操の父」とも称されるフリードリヒ・ヤーンという人物でした。彼が1810年にベルリンで始めたトゥルネン（Turnen）と呼ばれる体操が、その後の運動の礎になったと言えます。

これに対し、当時ハプスブルク帝国に属していたチェコ地域では、自発的結社が認められるようになった1860年頃から体操運動が始まっています。興味深いのは、運動を始めようとした時点ではチェコ系とドイツ系の区別は明確ではなかった点です。しかし、使用する言語などで揉めた結果、最終的には二つの結社が別々に設立されました。チェコ側のリーダーであったミロスラフ・ティルシュは、チェコ語でハヤブサを意味するソコル（Sokol）を団体名として用い、ドイツのトゥルネンとは異なるチェコ的な体操を積極的に提示していきます。モデルとされたのは、古典古代のギリシャでした。ギリシャ彫刻に見られる精悍な身体をイメージして頂ければ分かりやすいかと思います。美学者でもあったティルシュは、ドイツよりも遥かに古い伝統を持つ（と思われる）ギリシャに注目し、その理想的な身体をチェコ人によって再生させようと考えていました。こうした発想は特殊な例ではなく、ティルシュに見られるような古典古代への憧れは、当時のヨーロッパで広く見られた現象です。1896年に始まった近代オリンピックも、古代ギリシャ、特に古代オリンピック（オリンピアのスポーツ祭典）をモデルとしていました。

3. ビールと鉄棒、自殺とアル中

さて、シュムペルクの『宴会新聞』に戻りましょう。彼ら体操家は、いつも飲み屋で飲んだくれていたわけではなく、身体の鍛錬もちゃんと行い、時には公開の場でそれを披露していました。図3は、当地の体操協会が主催していた《森の祭り》のポスターです。1908年7月の週末に開催された祭りでは、体操家たちの演技が行われた他、人形劇小屋や食べ物の屋台が設けられ、楽団による演奏がなされていたようです。晩に開催されたダンス・パーティーには多くの若者が参加したことでしょう。また、祭りの参加者への賞品として、生きた子羊やガチョウの他、ビールも三種類、用意されていました。

ビールと男らしさが本格的に（？）結びつけられて考えられるようになったのは19世紀に入ってからと思われます。日本の大学でも依然として見られる一気飲みの文化も、元を正せばドイツ語圏の学生団体が起源なのかもしれません。1905年のスイスにおいても、或る学生が以下のような文章を書いています[3]。

図3. 体操協会主催《森の祭り》ポスター（1908年7月5日）

彼ら［学生］にとって、酒を飲むこととは、まさしく神聖なことなのである。彼らは単なる酔っ払いなのではなく、礼儀

3　リン・ブラットマン「決闘、酒、仲間とスイス学生連合」トーマス・キューネ編、星乃治彦訳『男の歴史：市民社会と〈男らしさ〉の神話』柏書房、1997年、121-122頁。

にかなった作法を取り交わしているのであり、したがって、これは、なにかある偉大な観念の象徴そのものなのだ。[……]

しかしながら、19 世紀から 20 世紀の転換期には反アルコール運動が高まったこともあり、あからさまに飲酒を見せつけるような場面は、少なくとも公式な場においては見られなくなっていました。1870 年代には、鉄棒の傍らに飲みかけのビールジョッキを置き、華麗な技を披露して悦に入るといった光景が見られたようですが、私が見た 20 世紀初頭の史料では、さすがにそのような絵や写真はありませんでした。ここでお見せしたポスターでも、体操家と平行棒は描かれていますが、ビールジョッキは含まれておりません。

その背景には、当時の社会でアルコール中毒や自殺が大きな問題になりつつあったという点も挙げられるでしょう。19 世紀後半は、都市化や産業化によって社会が急激に変化した時代でもありました。1897 年に出版されたデュルケムの『自殺論』などでは、伝統的社会の崩壊によって人間関係が劇的に変化し、人々が疎外感を抱きやすくなっている状況について説明が試みられています。そうした中では、脳天気に酒を飲めとも言っていられなくなったのでしょう。否、実際には、人々は漠然とした不安を感じていたからこそ、何やかんやと理由を付けて宴会を開いていたのかもしれません。

それに関連してもう一点指摘すべき点は、労働者階級の存在です。産業化が進んでいた当時、都市部には多数の人間が流入し、労働者という巨大な層を形成しつつありました。当初はエリート層から始まった体操運動においても、間口が広げられ、社会的下層に属す人々も入会するようになりましたが、他方では、労働者体操協会といった労働者独自の組織も形成され、既存の体操団体と競合するようにもなりました。ここで問題になったのが活動場所をどう確保するかという点です。労働者中心の体操組織においては、ガストハウスと呼ばれる居酒屋兼宿屋が拠点とされるケースが多く見られたのですが、その場合、体操するよりも先に飲んでしまうことがよくあったのではないかと思います。実際、当時のソコルでは、居酒屋で体操させることが本当に良いのかといった議論が行われています。特に、青少年の居酒屋通いは問題視されました。健全な肉体を得るために体操協会に通わせたのに、フタを開けてみればアル中になっていたというのでは意味がありませんから。

4. 体操とスポーツ、進化するドイツ人と退化するユダヤ人

飲酒と並んで体操家たちにとって悩ましい問題

図 4.『宴会新聞』に掲載されたスポーツ選手と体操家の違い
（20 世紀初頭・発行年記載無し）

が他にもありました。スポーツです。例えば、2011年に公開されたドイツ映画《コッホ先生と僕らの革命》では、イギリス発祥のサッカーをドイツに紹介したコンラート・コッホの悪戦苦闘ぶりが描かれています。教師であった彼は、19世紀後半のドイツで生徒たちにサッカーを教え始めるのですが、不道徳だという理由で多くの批判を浴びることとなりました。この映画はフィクションも混じっていますが、実在の人物コッホが経験した苦労は、概ねこんなものだったのではないかと思います。

では、なぜスポーツが敵視されたのでしょうか？

チェコ人やドイツ人の体操家たちは、スポーツをエゴイスティックで不健全なものと断じていました。彼らによれば、体操は民族の発展のために行われるのに対し、スポーツは、ただ楽しみだけのために行われるものでした。さらには、体操は身体の調和的な発達を促すのに対し、スポーツは、体の一部のみを不自然な形で鍛えるに過ぎませんでした。『宴会新聞』では、図4に見られるように、漕艇の漕ぎ手・サイクリスト・ボクサー・サッカー選手といったスポーツ選手の風刺画が掲載されていますが、いずれもいびつな体であったり、傷だらけの体であったりします。漕艇であれば腕だけが鍛えられ、サッカーでは足だけが鍛えられるといった具合です。後者の場合、足と頭に怪我を負うことも避けられません。これに対し、体操家の体は調和の取れた理想的なものとして描かれています。

このように、体操とスポーツを完全に別物として捉える視点は、現在の私たちにとっては意外に思われるかもしれません。しかし、当の体操家たちはスポーツの問題点について大真面目に論じていました。19世紀末には、スポーツの祭典たる近代オリンピックが開始されていますが、体操家たちはこれに対しても非常に敵対的でした。始まった当初のオリンピックは非常に地味なもので、今のように国を挙げて自国の選手を応援するといった雰囲気はありませんでした。初期の大会には、個人で参加する選手もいれば、ハプスブルク帝国のように、国全体で代表を出していないにもかかわらず、チェコやハンガリーといった民族や地域が個別に選手を送ったりするケースも見られました。

オリンピックが、全国家的・全国民的なイベントとして本格的に認識されるようになったのは、1936年のベルリン・オリンピックの時であったと言えるでしょう。水泳競技に前畑秀子が出場し、「前畑がんばれ！」のラジオ中継に日本人が熱狂したのも、このオリンピックでした。こうしたスポーツ・イベントが国境を越える形で注目を浴びるようになったのは、情報を瞬時に伝えるメディアの発達もありますが、ヒトラーによるところも大きいと言われています。ナチスの政権獲得以前に開催が決まっていたベルリン・オリンピックについて、彼は当初関心を持っていなかったようですが、すぐにスポーツ・イベントの「有用性」に気づき、ナチスを内外に宣伝するツールとして大いに活用しました。聖火リレーもナチス・ドイツの「発明品」です。古代ギリシャの遺跡で灯された炎は、バルカン半島を経由し、ハンガリーやチェコスロヴァキア等の中・東欧諸国を通ってベルリンへと運ばれていきました。この儀式は、古典古代の理想的身体がアーリア人の優秀な身体へと継承される様を象徴しているようにも見えます。ナチス・ドイツによって展開されていた反ユダヤ主義は、オリンピックの際は人々の眼に触れないように隠蔽されました。この時期、ドイツを訪れた人は、巨大スタジアムのスペクタクルに魅了されると共に、大恐慌からの素早い立ち直りを見せていたドイツ経済をも目の当たりにしました。彼らの多くは「ナチスも結構やるじゃないか」と感心して帰っていったようです。

図5.『宴会新聞』に掲載された「退化した」ユダヤ人（20世紀初頭・発行年記載無し）

話を20世紀初頭の『宴会新聞』に戻しましょう。スポーツ選手のいびつな身体が描かれたのとほぼ同じ時期、この新聞にはユダヤ人のいびつな身体も描かれていました。例えば図5に見られるように、身体と精神の両面で「退廃した」ユダヤ人の風刺画が掲載されています。ナチス・ドイツの時期に極限に達した人種主義の原型が、ここに表れていると言えるでしょう。もちろん、反ユダヤ主義そのものは近代以前から存在していましたが、ユダヤ人を宗教的存在ではなく人種的な存在と捉

える、つまり、改宗や同化によって非ユダヤ人社会に合流できない存在、と捉える見方は19世紀末に定着したものでした。この見方によれば、劣等人種であるユダヤ人は不完全な身体を有し、ドイツ人のような優秀な民族とは全く異なる、ということになります。ドイツ体操協会は、こうした新しいタイプの反ユダヤ主義をいち早く実践した組織の一つでありました。1901年、ドイツ体操家連盟の第15支部（ハプスブルク帝国のオーストリア部分（シュムペルクを含む）を包括する支部）では、いわゆる「アーリア条項」が採択され、6万名余りの会員の内、ユダヤ人および反ユダヤ主義に与さない会員約7千名が追放されています。

先ほど「退廃したユダヤ人」という言葉を用いましたが、退廃や退化といった言葉が医学用語として使われるようになったのも、ちょうどこの時期です。アルコールのところでも申し上げましたが、19世紀末は都市化や産業化によって人々のライフスタイルが急激に変化した時でもありました。市場だけでなく社会の様々な局面で競争原理が浸透することにより、頑張らなければ「自然淘汰」されるという恐怖感に人々は苛まれるようになります。社会ダーウィニズム的価値観と言っても良いでしょう。弱肉強食の世界で生き延びるためには、折れない心と強靱な身体を手に入れなければならない。そのように考えられるようになったのです。こうした中、ユダヤ人の身体は負のシンボルとしてイメージされるようになりました。当時の人種科学においては、ユダヤ人が精神病になりやすいことを示す統計や、ユダヤ人の間で同性愛の「発症率」が高いことを示す数値などが盛んに発表されています。今の視点から見れば、こうした学問は似非科学だと簡単に切って捨てることができますが、当時の人間は大真面目に論じ、多くの人がそれを信じていたという点は注意しておく必要があるでしょう。いずれにせよ、ユダヤ人の劣等なる身体は、裏返して言えば、一般市民の不安感の裏返しであったとも言えます。当時の人々は、負け組になる恐怖感に打ち勝つために、半ば無意識的に「弱者＝ユダヤ人」を設定して安心感を得ようとしていたと考えられます。その点では、スポーツ選手のいびつな身体も、同じ意識構造から創り出されたイメージであったのかもしれません。

5. ミクロな史料から何を読み解くことができるのか

時間が迫ってきましたのでそろそろまとめに入りたいと思います。本日の報告でメインの素材として使ったのは、チェコの地方都市シュムペルクで百年ほど前に発行されていた『宴会新聞』です。手書きで書かれた『宴会新聞』は大変貴重な史料ではありますが、このような風変わりな新聞から何をどこまで読み解くことができるのか、懐疑的な意見もあることと思います。この新聞は限られた地域、限られた層を対象としたメディアに過ぎなかったわけですから、当然のことながら、ここから当時の社会の全てが分かるわけではありません。しかし、仲間内を対象にした新聞であったからこそ、彼らの本音がダイレクトに反映されているという側面はあるかと思います。

今回の報告では、『宴会新聞』というミクロな史料から、19世紀末から20世紀前半までの長い期間を念頭に置きつつ、体操とナショナリズムの関係について分析を行いました。その際、アルコールと都市化・産業化、スポーツと体操の違い、身体観と反ユダヤ主義といった論点を交えながら、巨大なマスゲームが登場する背景について大まかな説明を行いました。私自身は歴史を専門としておりますが、例えば、『宴会新聞』というミクロな史料を目の前にしたとき、そこから何を見出すことができるのか。その読み解きの作業過程をご紹介した次第です[4]。

なお、最初に申し上げたように、こうした運動は中央ヨーロッパだけのものではなく、いわゆる「近代化」を経験した社会であれば、どこにおいても類似の現象が存在したと言えます。今回は時間の関係であまり紹介できませんでしたが、例えば、日本の運動会やラジオ体操も興味深い現象ですし、すでに多くの研究が行われています。地域研究者の場合、自分が研究対象とする地域に関心が限定されがちですが、こうした地域を越えた共通の現象を比較していくことも重要な課題と考えています。

4　チェコの体操運動については、拙著『身体の国民化：多極化するチェコ社会と体操運動』北海道大学出版会、2006年、ドイツの体操運動については、小原淳『フォルクと帝国創設：19世紀ドイツにおけるトゥルネン運動の史的考察』彩流社、2011年、を参照。